

古賀郷土史研究会通信

発行日

令和6年 7月15日

通信 (第20号)

「瓜木屋」の地名由来

江戸時代、蕨内には唐津街道が通っていました。その通りには「瓜木屋」(うりごや)という小字名があります。場所は医王寺から鷺白橋の間になります。黒田長政が入国後、青柳宿が出来、参勤交代が始まると、街道を通る人達が利用するようになりますと、街道は駕籠や馬の通交も多くなり、茶店など商売をする人達が集まって来て、唐津街道の両脇に店を構え始めました。やがて麴屋・醬油屋、お菓子屋などの売り小屋が立ち並び、唐津街道を通る人達も利用するようになり、一帯は市場のよくな賑わいになったそうです。地名も「売小屋」と言っていたのを、「売」を吉兆の「瓜」に変え「瓜木屋」に変えたと云われています。「瓜」は美人の瓜実顔から取ったものと思われれます。

「瓜木屋」は江戸末期に参勤交代が無くなると、人々の通交も少なくなり、それと共に店も少なくなり、昭和時代になると僅かに店が残っているほどになっていったそうです。現在、当時の面影を残すものは無く、地名だけが当時の賑やかな雰囲気を与えています。

(飯島勇一郎)

立花道雪も象を見ていた

薦野地区の天降神社には、平成3年に古賀町指定文化財の「木鼻の象」の彫刻があります。これは象の顔を彫刻したもので、拜殿の飾りになっています。現在、拜殿の新築工事が終わり見ることが出来ると思います。

私はこの「木鼻の象」を不思議に思っていました。日本での象の初見は江戸時代代から、どうして古い天降り神社に象の彫刻があるのか疑問でした。当時の人は象の存在を知っていたのだろうか、そういう思いでした。



天降神社の木鼻の象

多くの人達たちが知っている象の話は、江戸時代の享保十二年(1728)に「享保の改革」した徳川吉宗に献上するため、中国商人がベトナムから

雄雌の2頭の象を長崎に運んだとするもので、この象が、日本人が最初に見た象と私はずっと思っていたのです。ちなみに、雌象は到着後、約3ヶ月で死んだそうですが、雄象は翌享保十三年(1729)三月から2ヶ月かけて、長崎街道を通過陸路、江戸へ旅したそうです。江戸に着いた象は徳川吉宗に会い浜御殿(現在の浜離宮)で十二年間飼育されたそうです。

調べてみると慶長二年(1597)にマニラ総督から豊臣秀吉に象が送られ、慶長七年(1602)にはベトナムから徳川家康に象が送られています。しかし、驚くことに戦国時代に博多で立花道雪も象を見ていたことが分かり、これで天降神社の「木鼻の象」の存在を納得することが出来ました。

「豊前覚書」(城戸清種)によると、戦国時代の天正二年(1574)七月にポルトガルの交易船で虎4頭と象2頭が博多に到着しています。虎は2畳敷きほどの檻2つに入れられ博多万行寺(博多区)に着いたそうです。立花城城督立花道雪は宮崎宮座主の方清法印を伴って博多代官らと共に見物しています。当時、異国の猛獣・巨大な動物を初めて見た博多の人たちの仰天した様子が伝わってきます。像はその後、豊後の大友宗麟の下へ送られたと記しています。また城戸清種は「この象に御屋形様(大友宗麟)、御乗り成られ候時は、前ひざ折り候て、乗せ申事必定なり」と記し、宗麟の驚きの顔が浮かぶようです。

(飯島勇一郎)

江戸幕府の鎖国令に散った

悲劇の博多商人伊藤小左衛門

近世随一の豪商に上り詰めながら、禁制を破った、朝鮮への武器密輸で処刑された、伊藤小左衛門。鎖国に揺れる西国にあつて、海をめざして歴史に消えた最後の博多商人です。博多の豪商と云えば博多三傑と謳われ、信長・秀吉恩顧の嶋井宗室・神屋宗湛、黒田藩の御用商人になった大賀宗九が有名ですが、悲劇の豪商伊藤小左衛門、天領長崎代官にまでなった末次平蔵がいます。

「嶋井宗室(1539~1615)」墓地横岳山崇福寺、末裔印刷会社…、養嗣子信吉に十七条の訓戒を残す。

「神屋宗湛(1551~1635)」墓地石城山妙楽寺、末裔神屋浩氏十八代は、フランス料理店ピストロシエラパン経営。初代神屋永富主計、寿禎(石見銀山発見)紹策、宗湛、浩。

「大賀宗九(1561~1630)」墓地聖福寺幻住庵、大友氏に仕えた武士から商人へ、末裔大賀薬局。大賀宗九信好九郎左衛門、信貞惣右衛門宗伯(信好の三男1610~1665)。

「伊藤小左衛門(??~1667)」墓地妙楽寺、初代伊藤小左衛門吉次(??~1667、70歳)

「二代目小左衛門吉直(??~1667、47歳)

「末次平蔵(??~1676)」配流断絶

初代末次興善(平戸出身、1592年没?)、

末次平蔵政直(興善の次男1546~1630、

長崎に1571年頃移住、三代目長崎代官、末次平蔵初代長崎代官) 二代目茂貞平蔵(??~1651政直の子) 三代目茂房平蔵(政直の孫) 四代目茂朝平蔵(茂貞の孫、??~1676)断絶。

初代長崎代官は鍋島飛騨守直茂、二代目村山等安(1619年失脚処刑)、三代目末次政直平蔵が末次家初代から四代まで世襲しています。現在の福岡市博多小学校の場所に神屋宗湛の屋敷がありました。蔵本交差点あたりに大賀宗九、呉服町に嶋井宗室の屋敷があり、浜口公園付近に伊藤小左衛門の本店屋敷がありました。博多商人のルーツが、この周辺にあり、交差点が「神屋町」になっているのも、神屋宗湛に因んだもの、「蔵本」は、名護屋城の築城の為、物資保管庫があつたことから、この地名がついたといわれます。周りに「博多博物館電柱歴史案内」が沢山設置され、昔の地名や歴史が紹介されています。

江戸幕府の鎖国(1633年)により、貿易の中心が、幕府直轄港「長崎」に移り、それに伴つて浄瑠璃「博多小女郎 浪枕」(近松門左衛門作)のモデルになった伊藤小左衛門や後に長崎代官を務めた末次平蔵など博多商人の中には新天地「長崎」に移り住む者も出てきました。長崎には、興善町や今博多町等縁の町名があります。江戸初期、黒田藩を財政的に支え、対朝鮮貿易で財を築いた当代随一の豪商伊藤小左衛門(銀七千貫を持つ大豪商、当時銀千貫以上で豪商といつた)でした。伊

藤家と黒田藩の関係は、二代目小左衛門と黒田三代藩主光之の時非常に強力になっています。

1667年幕府の鎖国政策に反して、朝鮮と密貿易を行った罪により、伊藤小左衛門とその一族は処刑されました。後年、光之は小左衛門を処刑し、闕所にしたことを、わが治世のあやまちの一つであつたと繰り返して言っていたと伝えられています。事件の発端は「対馬や長崎の商人が朝鮮に武器を輸出している」との訴えが公儀に寄せられたとも、小左衛門の手代が乗った船が対馬で難破し密貿易品を積んでいることが露見したから、とも言われています。二代目小左衛門以下長崎店の主だった人々が長崎で捕縛され、小左衛門は長崎で磔。博多浜口町の本店を守る長男甚十郎以下一五〇余人が捕手に召し捕えられたのは十月十五日。この日、甚十郎の婚礼が予定されていた。甚十郎は博多で斬首。この時、五歳三男の小四郎、三歳四男萬之助も共に処刑され(一説には刑を免れたとも)、二人の不憫を思つた博多の人たちは二人の霊を「萬四郎神社」として祀つた。商売繁盛や子供の健やかな成長に、特に古賀の人には、小左衛門の出自が木屋瀬から青柳、博多の縁でご利益?伊藤家墓地正面に「伊藤小左衛門親子哀悼碑」が建つております。又、妙楽寺には伊藤小左衛門の博多人形も秘蔵されています。詳しくは、「伊藤小左衛門」研究をライフワークとされた武野要子(経済学者)著書「悲劇の豪商・伊藤小左衛門」古賀市立図書館所蔵を閲覧下さい。(松田信一郎)